

## 発達障害のある子どもを対象としたタグラグビーにおける対人関係の様相 —支援者と子どものかかわりに着目して—

大坂 美悠\*, 佐々木 全\*\*

(2019年2月15日受理)

Miyu OOSAKA, Zen SASAKI

Aspects of Interpersonal Relationships in Tag Rugby for Children with Developmental Disabilities

: Focusing on the Relationship between the Supporter and the Child

### 要 約

本研究の目的は、発達障害のある子どもを対象としたタグラグビーのプレー中において、子どもと支援者の間でどのようなコミュニケーションが図られているか、その様相を明らかにすることである。

そのために、Y団体におけるタグラグビーの活動の動画記録と支援者が記録した活動記録から子どもと支援者の間で行われているコミュニケーション場面と内容をエピソードとして抽出し、意味内容が類似する内容をまとめカテゴリー化した。また、それらの相互の関係を検討し、カテゴリーを階層化した。

その結果、タグラグビーの活動における子どもと支援者の間での対人関係場面として、105件のエピソード記述が得られ、これらから2つの大カテゴリー「支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達」「子どもと支援者の間で見られた感情の交流」と、これらを構成する4つのカテゴリーが得られた。これらは、プレーの成功を目指す支援としてのかかわりであるといえた。

### I はじめに

近年、子どもたちの健全育成のために、放課後や休日における地域生活の充実の必要性が指摘され、全国各地で多様な取組みがなされている<sup>1)2)3)</sup>。このような活動は、当然ながら障害の有無や障害種を問わないテーマである。しかし、LD, ADHD, 自閉スペクトラム症等のいわゆる発達障害者においては、既存の活動（例えば学齢期においては、学童保育, 学習塾, スポーツ少年団など）に馴染みにくいことが少なからずあり、その補完的な活動の場や、積極的な適応の場としての活動

が必要である。

これらの事情に対応して、親の会や専門家グループなどの支援団体が放課後活動や休日活動を企画し提供する実践がある。X県内においても、このような支援団体は複数あり、それぞれの拠点地域での事業を展開している<sup>4)5)</sup>。その一例として、筆者らによる発達障害者を対象としたタグラグビーの実践がある<sup>6)7)8)</sup>。タグラグビーとは、ラグビーの簡易普及版であり、接触プレーがないことや、ボールの操作に関してドリブルなどの専門技能を要さないことなどから取り組みやすい。また、接触プレーを排除したことによって独自の競

\*北上市立江釣子小学校, \*\*岩手大学大学院教育学研究科

技特性を有すことになり、そこに競技としての面白さが生まれている<sup>9)10)11)</sup>。

発達障害者を対象としたタグラグビーに関する先行研究について、CiNiiを用いて「タグラグビー」を検索ワードとして先行研究を調査したところ、55本の論文や実践報告が挙げられた(2018.2.22.閲覧)。そのうち、24本が小学校体育などにおけるタグラグビーの教材研究に関するものだった。これは、小学校体育の学習指導要領(2008年告示)に「陣取り型ゲーム」としてタグラグビーが例示されたこと察せられた。次いで、筆者らによる発達障害者を対象とした実践研究が11本を占めた(うち3本は被引用論文として重複表示されており、実数は9本)。他は、タグラグビー自体の理論的研究、大学生の教育や地域貢献活動などへの援用などが散見された。

つまり、現時点でタグラグビーに関する研究は希少であり、まして発達障害者を対象とした実践及び研究に関しては極めて独自性、新奇性が高い。それゆえ、筆者らは自らの実践において、タグラグビーの課題分析や対象者に応じた支援方法などを独自の努力によって開発してきた。

しかし、発達障害者は、運動面、認知面、社会面において個別多様の困難さを有することが多いが、それによって、タグラグビーにおいては、次のような困難さのエピソードを認めることがある<sup>12)13)</sup>。すなわち、①運動面として、投球や捕球動作ならびに円滑な身のこなし、②認知面として、ルールや戦術の理解や状況判断や空間認知に基づくポジショニング、③社会面として、仲間との協働や共感ならびにプレーの成否に伴う感情の適切な統制と表出、などである。

これらの特徴あるいは症状は、個別のものであり、その内容や程度は多様である。また場合によっては活動への参加や持続を脅かすリスク要因となることも少なくない。実践上は、これらの特徴あるいは症状に十分配慮した支援方法が必要である。当然ながら、この開発は支援のニーズに基づくものであり、そもそもタグラグビーのプレー中における、発達障害者の運動面、認知面、社会

面それぞれの様相が明らかにされることが必要であろう。

そこで、筆者らはその着手として本研究を位置づけ、まずは社会面、特に対人関係として焦点化する。その上で、本研究の目的は、タグラグビーのプレー中における対人関係場面の様相を明らかにすることである。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査対象

調査対象は、X県内で発達障害への支援を行うY団体におけるタグラグビーの活動である。これは、6月から10月まで毎月一回、計5回開催され、20XX年当時18名の幼児から高校生までの発達障害のある子どもが参加した。支援者は、筆者らを含む有志スタッフである。その内訳は、C大学の支援者有志14名、Y団体の運営スタッフである教育・保育の専門家等7名である。

活動グループは、小学3年生以下のグループと小学4年生以上のグループに分けて編成した。これは、競技に関する理解、技能、経験、身体の発達段階等に関する差異を考慮したものであり、本研究では前者に焦点化した。

このグループの構成は、通常学級及び特別支援学級に在籍する小学3年生男児3名、女児1名を対象とした。支援者は、Z大学教育学部支援者4名及び特別支援学校等の現職教員2名であった。

このグループの実施状況は、筆者らの先行実践に基づき以下のように構想し、かつ、参加者に適合するよう独自部分を含んだ。

会場は、小学校体育館を借用し、バスケットボールコートを使用する。サイズは縦20メートル程度、横9メートル程度である。コート両側長辺をタッチライン、短辺をゴールライン、中央をハーフウェイラインと称する。また、自チームが守るべきゴールラインからハーフラインまでのエリアを自陣、ハーフラインから自チームが目指すべきゴールラインまでのエリアを敵陣と称する。これらは正式な競技とは異なる独自のものである。

チームは、各チーム2名の子どもと3名の支援者をもって構成した。2名の支援者は、それぞれ子ども一人一人とコンビとなり、コート両サイドにおけるコンビネーションプレーの遂行をめざす。1名のスタッフは、コート中央にてゲームメイクを担う。このイメージを戦術の例として図1に示した。

活動の内容と展開は、ウォーミングアップ、基本的な競技動作の練習、基本的な戦術の練習を経てゲーム、クールダウンである。また、活動中は、適宜水分補給をし、支援者は子どもの健康状態を観察した。活動5回を通じては、子どもたちの競技に対する理解、技能、経験等の習得や発揮状況に応じて段階的に取り組んだ。具体的には、ゲームの内容と展開においては、初回においては、一般的なタグラグビーで採用されている攻守の交代がゲーム中に切り替わる一般的な展開ではなく、一定時間攻撃を繰り返し、攻守交替し一定時間守備を繰り返す、いわば「野球型」の展開とした。これは、攻守の切り替えによって生じる高度な状況判断を軽減すること、及び攻撃プレーと守備プレーそれぞれの戦術的理解と遂行について、一定時間繰り返し実施することでその習得と発揮を促

進することを意図したものであり、先行実践研究<sup>16)</sup>において開発された手法であった。なお、3回目以降には、徐々に1ゲーム中の交代場面を取り入れ、最終回では、攻守の交代がゲームの流れの中で切り替わる一般的な展開に完全に移行し、タグラグビーとしてのゲームの形式が概ね整えられた。

タグラグビーのルールは、以下の通りである。  
 ①1チームを5名で編成する。プレーヤーは、タグを腰の両側につける。  
 ②攻撃では、ボールを持ってゴールラインを踏み越える「トライ」と称するプレーで得点となる。  
 ③パスは、横または後ろにいる味方に行く。前にパスを出すと「スローフォワード」という反則になる。  
 ④守備では、ボールを持っている相手のタグを獲る「タグ」と称するプレーで相手の進行を止める。タグを獲られたプレーヤーは、その位置から味方にパスを出してプレーを再開する。  
 ⑤得点した場合やタグを5回連続で獲られた場合には攻守交代する。  
 ⑥その他、ゲームの細部においては、会場の物理的な制限や、参加児の様子に合わせて、タグラグビーの競技としての独自性を損なわない程度にルールの変更やアレンジを施した。

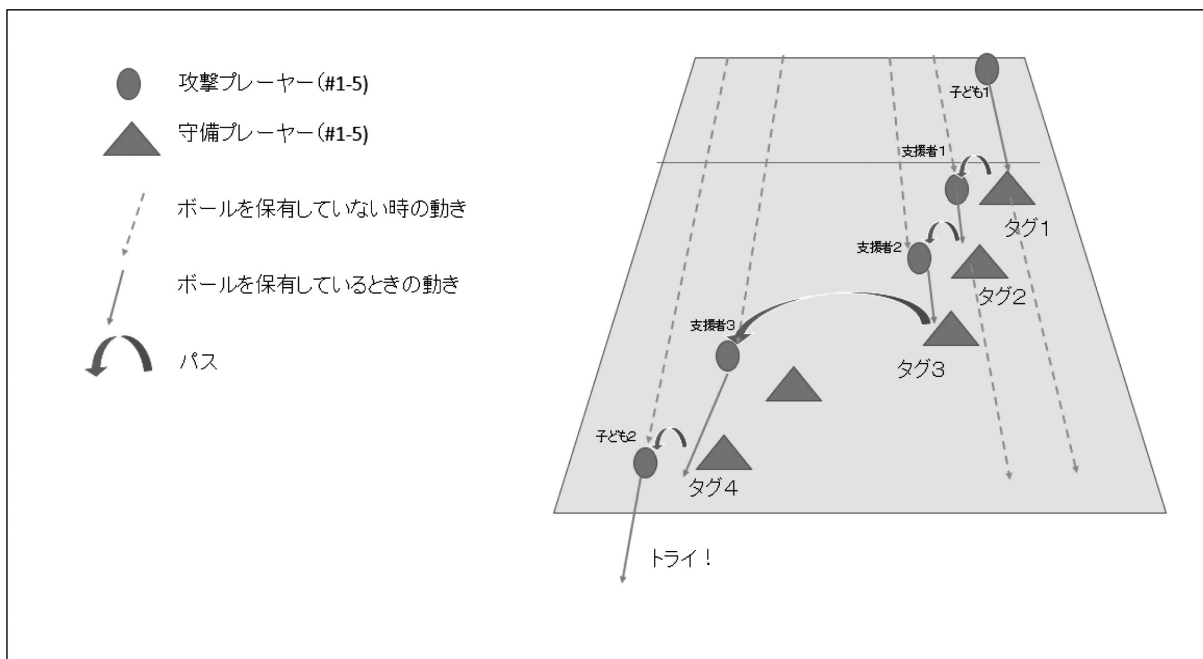


図1 タグラグビーにおけるプレーのイメージ (戦術の例)

なお、参加児の様子に合わせたルールの変更には、不慣れさに応じた軽減的で配慮的な変更もあれば、プレーの成熟に応じた発展的な変更も含まれる。例えば、配慮的なルールとして「タッチラインを踏み越えた場合、その位置からのパスを持って攻撃プレーを再開する。ただし、これは「タグ」1回とみなす。活動中は審判役の支援者が、随時必要に応じて解説などを交えながらルールに則したプレーを促した。

## 2. 調査方法

本研究の調査方法は、次の通りである。20XX年6月から10月までの全5回の活動のうち、タグラグビーとしての競技の形式が概ね整った最終回の動画記録から子どもと支援者の間の対人関係場面と内容を抽出し、エピソードとして記述する。動画記録は、異なる角度から2台のビデオカメラによって撮影された。撮影時間は57分16秒であり、このうちゲームのインターバルを除外した30分間（1ゲームにつき6分間×5ゲーム分を分析の対象とした。また、支援者による毎回の活動記録と対照し、エピソード記述の妥当性、信頼性の担保に努めた。

## 3. 分析方法

エピソード記述の一つ一つをカードに記し、これらをKJ法<sup>14)15)16)</sup>を参考にして分析した。この分析では、意味内容が類似する内容をまとめカテゴリー化した。また、それらの相互の関係を検討し、カテゴリーを階層化した。これらの作業は、筆者らに研究協力者2名を加えた4名で実施した。

## 4. 倫理的配慮

本研究の着手と公開に際しては、Y団体の主宰者ならびに参加者、支援者に予め依頼し承諾を得た。また、動画記録データの管理は厳重に行い、その分析作業及びエピソードの記述、本文執筆における表記においては匿名性を担保した。

## Ⅲ 結果と考察

Y団体におけるタグラグビーの活動における子どもと支援者の間での対人関係場面として、105件のエピソード記述が得られた。これらについて分類したところ、表1の階層的なカテゴリーが得られた。ここでは、2つの大カテゴリーとこれらを構成する4つのカテゴリーがあった。カテゴリーは10個のサブカテゴリーから構成された。

これらの詳細は後述するが、エピソード記述の内容として抽出された子どもと支援者の間での対人関係は、プレーの成功を目指した支援としてのかかわりであることが明らかであった。そこで、支援方法を分析的に把握する際に用いる「支援の三観点」すなわち、①コト（活動の内容と展開）、②モノ（場の設定、道具）、③ヒト（伝達、共感<sup>17)</sup>）を対照したところ、「支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達」「子どもと支援者の間で見られた感情の交流」とそれぞれ定義された2つの大カテゴリーは、「ヒト」における伝達の機能と、共感の機能に符合すると考えられた。そこで、支援方法の三観点における「ヒト」をもって、これら2つの大カテゴリーを包括し、その上で「支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達」と定義された大カテゴリーを「伝達」、 「子どもと支援者の間で見られた感情の交流」と定義された大カテゴリーを「共感」とそれぞれ命名した。

### 1 「伝達」(支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達)

Y団体におけるタグラグビーの活動においては、子ども一人一人が自らの志向に基づき、持てる力を発揮してプレーできるように、適材適所の役割分担をし、その遂行をチームワークとして位置づける戦術の考案と実施が支援の手立てとして考えられている<sup>18)19)</sup>。このことに基づけば、支援者による主要な支援の手立てとして、「支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達」がなされることは必然であった。

表1 タグラグビーの活動における子どもと支援者の間での対人関係場面としてみられた「ヒト」による支援

大カテゴリー	定義	カテゴリー	サブカテゴリー	エピソード記述の件数
伝達	支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達	攻撃場面における伝達	トライを決めるための伝達	20
			パスを受けるための伝達	15
			パスを出すための伝達	20
			ランをする（目的地に走り込む）ための伝達	8
			ポジションをとるための伝達	4
		守備場面における伝達	守備位置に着くための伝達	7
			標的とする相手プレーヤーを把握するための伝達	13
共感	子どもと支援者の間で見られた感情の交流	成功に対する喜びの共感	自分のプレーの成功に対する喜びの共感	10
		失敗に対する励ましによる共感	仲間のプレーの成功に対する喜びの共感	7
			プレーの失敗場面における、支援者から子どもに対する励ましによる共感	1
合計				105

大カテゴリー「伝達」は、タグラグビーのプレー場面に即した次の2つのカテゴリー「攻撃場面における伝達」「守備場面における伝達」から構成された。具体的には以下の通りである。

#### (1) 攻撃場面における伝達

カテゴリー「攻撃場面における伝達」は次の5つのサブカテゴリーから構成された。すなわち、①トライを決めるための伝達、②パスを受けるための伝達、③パスを出すための伝達、④ランをする（目的地に走り込む）ための伝達、⑤ポジションをとるための伝達、である。これらについて、根拠となったエピソード記述を併せて表2に一覧した。なお、エピソード記述においては同内容、同表記の記述も併記した。以下同様である。

これによれば、①トライを決めるための伝達の場面では、「C児のパスからリスタートする場面で、右横にいた支援者がC児からパスを受け取り、少し進んでA児に手渡しでパスを出した。パスを受けたA児はスピードを保ったまま相手チームの守備プレーヤーを振り切りトライをした」「B児のパスからリスタートする場面で、支援者はB児から手渡しでパスを受け取り、少し前に行くふ

りをして、逆サイドにいる支援者へロングパスを出す。パスを受けた支援者は、左側にボールを差し出しながら「来てきて」と声を掛け手招きすると、C児が向かってきてボールを受け取りそのままトライした」などのエピソード記述が20件あった。ここでは、支援者がボールを差し出して手渡しのパス（いわゆるハンドオフパス）をし、それを子どもが受け取ってトライを決めることが多くあった。この中では、呼名や声掛け、指差し、アイコンタクト、手招き、子どもの背を押すなど、支援者が子どもに合わせて多種多様な伝達表現によるかわりがあった。なお、ハンドオフパスは、パスの捕球動作や、駆け出しのタイミングや走路の選択などの状況判断が未熟である子どもにとって有効な戦術であり、支援である。この状況のイメージを図2に示した。

②パスを受けるための伝達の場面では、「支援者がタグをとられた場面で、右にボールを差し出すと、右後ろにいたA児がトップスピードでパスを受け取りゴールに向けて駆け上がった」「支援者がタグをとられた場面で、その後方にいたB児に対し、手を伸ばしボールを指し出すと、B児

表2 攻撃場面における伝達

サブカテゴリー名	エピソード記述
	<p>・C児のパスからリスタートする場面で、右横にいた支援者がC児からパスを受け取り、少し進んでA児に手渡しでパスを出した。パスを受けたA児はスピードを保ったまま相手チームの守備プレーヤーを振り切りトライをした。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、ボールを右側に差し出すとA児が受け取り、相手チームの守備プレーヤーを避けながら走り、トライを決めた。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、左足を横に踏み出し、かつ手を伸ばしてボールを持っていると、右横にいたA児が気付いてボールをもらいに行き、そのままトライを決めた。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、左横にボールを差し出していると、左横からA児が走り込んできてパスを受け、そのままトライを決めた。</p> <p>・支援者がコート右側でタグをとられた場面で、左横に手を伸ばしA児にパスすると、A児は一步近づいてパスを受け取った後左側に逃げるように走りそのままトライを決めた。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で右側に手を伸ばし、ボールを差し出すようにすると右斜め後方にいたB児はその手からボールを受け取り、トライを決めた。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で右側に手を伸ばしボールを差し出すと、右横にいたB児はボールを受け取り走りですが、トライできなかった。</p> <p>・支援者がコート右端でタグをとられた時、右側にボールを差し出し、B児が右後ろから走り込んできたところでパスを出し、B児はそのままトライを決めた。</p> <p>・支援者がパスを受けた後まっすぐ走りタグをとられた場面で、右側にボールを差し出すと、右後ろをついてきていたB児がボールを受け取りトライを狙うがタグをとられてしまう。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、右隣のB児の目の前にボールを差し出すと、手渡しでパスを受け取りB児はトライを決めた。</p>
トライを決めるための伝達	<p>・支援者がタグをとられた場面で、右横にボールを差し出し呼名すると、後ろからB児が走ってきてボールを受け取った。その後支援者は「そのまま」と声を掛け、B児はまっすぐ走ってトライを決めた。</p> <p>・支援者がA児からパスをもらった時、コートの逆サイドにいた支援者にロングパスを出すフェイントをしてから、B児の名前を呼びながら右横のB児にパスを出すと、ボールをもってそのままトライを決めた。B児は「わーい！やった！」とトライを決めて喜んだ。</p> <p>・B児のパスからリスタートする場面で、支援者はB児から手渡しでパスを受け取り、少し前に行くふりをして、逆サイドにいる支援者へロングパスを出す。パスを受けた支援者は、左側にボールを差し出しながら「来てきて」と声を掛け手招きすると、C児が向かってきてボールを受け取りそのままトライした。</p> <p>・サイドチェンジのロングパスを左サイドで支援者が受けた場面で、支援者はまっすぐ走りタグをとられた後、左側に手を伸ばしてボールを差し出すと、少し間を置き左後方にいたC児が走り出し、そのボールを受け取りそのままトライした。</p> <p>・ボールを持った支援者とC児がサイドライン際を併走した場面で、支援者が左横にボールを差し出すと、左横にいたC児がパスをもらいそのままトライした。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、左隣にいたC児に手渡しでパスをすると共に、その背を押して前に進むことを促すと、C児が走り込んでパスを受けてトライした。</p> <p>・サイドチェンジのロングパスを左サイドで支援者が受けた場面で、左隣のC児にボールを差し出しながら背中を押して促すと、C児は駆け出しながらボールを受け取りそのままトライした。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、左斜め前にボールを差し出すと、C児が左斜め後ろから走り込んできてボールを受けそのままトライした。</p> <p>・A児からのパスを支援者が受け取った場面で、支援者が前進して相手の守備プレーヤーを引きつけた後に左横のC児にパスを出し、それを受けたC児がそのままトライを決めた。</p> <p>・A児からのパスを支援者が受け取った場面で、パスを受けた支援者は少し前に攻め、左横にいたC児の背中を押して前に進むことを促してからボールを渡すと、C児がそのままトライを決めた。</p>
攻撃場面におけるパスを受けるための伝達	<p>・支援者がタグをとられた場面で、一歩右に踏み出して手を伸ばしボールを差し出すようにすると、右後ろにいたA児が走り込んできてパスを受け取り、その勢いそのままゴールに向けて駆け上がった。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、右にボールを差し出すと、右後ろにいたA児がトップスピードでパスを受け取りゴールに向けて駆け上がった。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、手招きしながら右側に手を伸ばしボールを差し出すと、A児が右斜め後方からボールに向かって走り込み、パスを受けゴールに向けて駆け上がった。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で手を伸ばしボールを差し出していると、A児がボールを受け取り、走っていきパスを受けゴールに向けて駆け上がった。</p> <p>・支援者がタグをとられた場面で、右側にボールを差し出すと、右後ろからA児がボールを受け取り、ゴールに向けて駆け上がった。</p> <p>・支援者はパスを受けた場面で、少し前に進んだ後、右横にボールを差し出すと、右後ろから走ってきたA児がパスを受けゴールに向けて駆け上がった。</p>

サブカテゴリー名	エピソード記述
	・支援者がタグをとられた場面で、右手でボールを持ちA児の前に差し出すと、A児はボールの方に向かって走っていきボールを受けゴールに向けて駆け上がった。
	・支援者がタグをとられた場面で、左横にいるA児にボールを差し出し手渡しパスをするが、キャッチする前にボールが落ちてしまった。
	・支援者がタグをとられた場面で、左後ろにボールを差し出すと、左後ろから駆け込んだA児がパスを受けて攻めようとするが、直後に相手守備プレーヤーによってタグをとられてしまった。
	・支援者がコート右側でタグをとられた場面で、左横に腕を伸ばしてボールを差し出すとA児がパスを受け取ったが、直後に相手チームの守備プレーヤーによってタグをとられてしまった。
	・支援者がタグをとられた場面で、その手を伸ばし右側にボールを差し出すとA児がボールを受けゴールに向けて駆け上がった。
	・支援者がボールを持って駆け出した場面で、追走していたA児に合わせて手を伸ばしボールを差し出すと、右後ろから来たA児はボールを受けゴールに向けて駆け上がった。
	・支援者がタグをとられた場面で、その後方にいたB児に対し、手を伸ばしボールを指し出すと、B児はボールを受け取り、支援者の右側を通って走っていった。
	・支援者がコート右端で支援者がタグをとられた場面で、右手でボールを差し出していると、右後ろからB児が走り込んでボールを受け、直後に相手チームの守備プレーヤーによってタグをとられてしまった。
	・ゲームがスタートした場面、支援者が左側にいたC児にパスを出す、C児は取れなかった。直後のリスタートでは、手渡しように支援者がパスを出す、C児はキャッチし、ゴールに向かって駆け上がった。
	・コートの中央付近でA児がタグをとられた場面で、右斜め後ろから支援者が「はい！」と声を掛けパスを受けるジェスチャーをすると、A児がパスを出した。
	・A児がタグをとられた場面で、右後方にいた支援者がA児と視線を合わせながら「はいはい！」とパスを呼び、パスをもらうジェスチャーをするとA児はすぐにパスを出した。
	・A児がタグをとられた場面で、支援者が左後ろから拳手をし、合図をしながら向かって行くとA児がそれに気づき、手渡しによるパスを出した。
	・A児がコートの右側でタグをとられた場面でその左斜め後方から支援者が手を挙げて「はい！」と合図をしてパスをもらうことを伝えた。A児はタグを取られた後すぐに支援者にパスを出した。
攻撃場面におけるパスを出すための伝達	・A児がタグをとられた場面で、右後方から支援者がパスをもらいに走り、支援者がボールを受け取る。
	・A児が右サイドでタグをとられた場面で、パスを出そうとしているA児の左後ろにいた支援者が向かって行きパスを受けた後、もう一人の支援者にロングパスを出した。
	・A児がコートの右側でタグをとられた場面で、後ろを振り向くタイミングで左後ろにいた支援者が走り出し、A児がパスを出した。
	・A児がタグをとられた場面で、取られた位置まで戻するのに合わせて右隣の支援者が動きパスを求め、A児が戻った瞬間にパスを出した。
	・B児がコートの右ライン際でタグをとられた場面で、左斜め後ろにいた支援者が手を挙げて、パスをもらおうとするとB児は歩いて支援者のところへ来て手渡しでボールを渡した。
	・B児からのパスでリスタートする場面で、B児の左後方にいた支援者がB児にパスをもらいに行くと、B児はパススムーズにパスを出した。
	・B児からリスタートする場面で、B児がボールを差し出して、左横にいた支援者を呼び込み手渡しによるパスを出した。
	・B児がコート右横でタグをとられた場面で、B児がボールを差し出して、すぐ左横にいた支援者を呼び込み手渡しによるパスを出した。
	・B児がボールを差し出して、手渡しでパスをだそうとする場面で、左後ろから走りながら支援者がボールを受け取りこぼしてしまった。
	・B児がタグをとられた場面で、すぐに左横にいる支援者がかけよると手渡しでパスを出した。
	・B児がタグをとられた場面で、両手を伸ばしてボールを差し出し、左横から支援者にパスを出した。
	・C児のパスからスタートする場面で、C児が誤判断で前にパスを出すことを予防するため、右横から支援者が手渡しでパスをもらいに駆け寄るとそれに応じて手渡しでパスを出した。
	・C児がタグをとられた場面で、すぐに右隣に位置どっていた支援者にパスを出した。
	・C児がコートの右側でタグをとられた場面で、右横から支援者が両手を差し出してパスをもらうジェスチャーをすると、それに応じてパスを出した。
	・C児がタグをとられた場面、右横にいた支援者が手を開いてパスをもらうジェスチャーをすると一瞬の間を置きC児はパスを出す。
	・A児のパスからゲームが再開する場面で、体を進行方向に向けたまま、後ろにパスを出そうとするA児に対して、支援者が体の向きを後ろに向けるように促し、その要領として、自分の足をパスを出す相手に向ける動作を伝え、パスの動作を一緒に行い確認した。

サブカテゴリー名	エピソード記述
攻撃場面における「ランをする(目的地に走り込む)」ための伝達	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A児がコート右側に走り込みタグをとられた場面、左後ろにいた支援者は右斜め後ろに残っていたB児を手招きで呼ぶとB児はそれに応じてかけ出し、指差されたスペースに向かった。</li> <li>・スタートの笛が鳴った場面で、左横にいた支援者がコートの右側にいるB児の背を押すと、B児はゴールエリアを目指してかけた。</li> <li>・スタートの笛が鳴った場面、コートの右側にいたB児の背中を左横にいた支援者が押して走り出しを促すと、B児はまっすぐ走りだした。</li> <li>・スタートの笛が鳴った場面、コートの右側にいたB児の背中を左横にいた支援者が押して走り出しを促すと、B児はまっすぐ走りだした。</li> <li>・ボールを持ったC児が駆け上がっている場面で、右後ろにいるA児を支援者が呼名しながら二人で追走を始めた。</li> <li>・スタート時にC児が駆け出しを躊躇った場面で、支援者がC児の背を押して促すと駆け出した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者がボールを持ちながらも駆け出しを躊躇っていたC児の背を押して前に進むことを促した。</li> <li>・B児がサイドラインを踏み越えてしまった場面で、支援者がラインを出ると得点にならないことを伝えた。</li> </ul>
攻撃場面における「ポジションをとる」ための伝達	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A児がコートの右端でタグをとられた場面で、セットプレーのために支援者がB児の手を引き、A児の左斜め前に誘導し、戦術を伝え、リスタートした。</li> <li>・コート右側にいるB児のパスから試合が再開する場面で、4番の支援者が1番と2番にいる支援者とC児に対してライン際に行くようにジェスチャーで伝えと、二人はそれに応じてコートの左端に寄るように動いた。</li> <li>・B児がコートの右側でタグを取られた場面で、コートの左側にいた支援者がC児の肩に手を置き、ボール保持者に寄っていかないように定位置を確認したをした。その直後に右サイドからのロングパスを支援者が中継しC児がトライをした。</li> <li>・B児のパスによるリスタートの場面で、パスよりも前に走り出してしまったD児に対し、支援者が実際に動きの手本を示し、パスを受ける動きを確認した。</li> </ul>

はボールを受け取り、支援者の右側を通って走っていった」などのエピソード記述が15件あった。ここでは、支援者がボールを差し出しているところに、子どもが走り込みボールを受け取っていた。これは、ゴール前で実施されれば、トライを決めるための戦術であり、コート中盤で実施されればボールを進めるための戦術といえた。いずれもハンドオフパスが基本戦術に位置づけられていたことの必然である。

③パスを出すための伝達の場面では、「B児がコート右横でタグをとられた場面で、B児がボールを差し出して、すぐ左横にいた支援者を呼び込み手渡しによるパスを出した」「コートの中央付

近でA児がタグをとられた場面で、右斜め後ろから支援者が『はい!』と声を掛けパスを受けるジェスチャーをすると、A児がパスを出した」などのエピソード記述が20件あった。ここでは、ボールを差し出している子どものところに、支援者が走り込みボールを受け取ることが多かった。このことは、子どもによるハンドオフパスの実施である。パスに用いる投球動作や状況判断が未熟である子どもに対する支援として講じられた内容であり、投球せずにすみ、かつ有効な戦術として考案されたものであった。また、投球動作が比して円滑にできそうな状況においては、支援者が子どもに声を掛けたり、ジェスチャーをしたり、手を挙



図2 ハンドオフパスのイメージ (状況に応じて支援者の体の向きが異なることがある)



げたりしてアピールをし、子どもが支援者にパスを出すことも見られるようになった。

④ランをする（目的地に走り込む）場面では、「A児がコート右側に走り込みタグをとられた場面、左後ろにいた支援者は右斜め後ろに残っていたB児を手招きで呼ぶとB児はそれに応じてかけ出し、指差されたスペースに向かった」「スタートの笛が鳴った場面、コートの右側にいたB児の背中を左横にいた支援者が押して走り出しを促すと、B児はまっすぐ走り出した」などのエピソード記述が8件あった。ここでは、支援者が子どもの背を押したり、手招きや指差しをしたり、呼

やアイコンタクト、あるいは、スタッフが併走することによって促していた。また、特定の子どもに対する同一エピソードがあり、支援的な意図による繰り返しのかわりがないように促されていた。

⑤ポジションをとる場面では、「A児がコートの右端でタグをとられた場面で、セットプレーのために支援者がB児をA児の左斜め前に誘導し、戦術を伝え、リスタートした」「B児のパスによるリスタートの場面で、パスよりも前に走り出してしまったD児に対し、支援者が実際に動きの手本を示し、パスを受ける動きを確認した」などのエピソード記述が4件あった。ここでは、支援

表3 守備場面における伝達

サブカテゴリー名	エピソード記述
守備位置に着くための伝達	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スタートの場面で、支援者が左斜め前にいたA児の背中を押し定位置に戻るよう促すと、A児は守備の定位置に戻った。</li> <li>・相手チームのリスタートの場面で、相手攻撃プレーヤーに抜かれ取り残されてキョロキョロしているB児を、前方から支援者が迎えに行き手をひき、新たな守備位置に着くよう促した。</li> <li>・ゲーム終了の予鈴であるタイマーが鳴った場面で、得点板の方に向かうB児を左下から支援者が呼名と手招きで守備位置に戻るよう伝えると、B児はそれに応じて守備位置に着いた。</li> <li>・スタート直前の場面で、得点板にいるB児を支援者が守備位置から手招きで呼ぶと、B児は駆け足で守備位置に着いた。</li> <li>・相手チームのリスタート場面で、支援者は自分の右前にいたC児に対し、指でC児の守る5番の床の方を指差すと、C児は定位置に戻ってきた。</li> <li>・相手チームのリスタートの場面で、相手攻撃プレーヤーに抜かれ取り残されているC児を、支援者が新たな守備位置を指差すと、C児は直ぐにそこに着いた。</li> <li>・攻撃を終えC児が自陣に戻る場面で、支援者が定位置を指差して示すと、C児はそこに着いた。</li> </ul>
標的とする相手プレーヤーを把握するための伝達	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スタートの場面で、支援者が守備の標的とすべき相手を指さし確認すると、それを模してA児も同様に目の前にいる相手を指差し確認した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし確認した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし、タグをねらうよう確認した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし、B児と視線を合わせてタグをねらうことを確認した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし、B児と視線を合わせてタグをねらうことを確認した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし、B児と視線を合わせてタグをねらうことを確認した。</li> <li>・スタートの場面で、よそ見をしているB児に対して、指差して守備の標的とすべき相手を指さし、B児と視線を合わせてタグをねらうことを確認した。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし、B児と視線を合わせてタグをねらうことを確認した。しかし、B児に相手が向かってくると体が固まってしまうタグは取らなかった。</li> <li>・スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さしとビブスの番号を越えに出して伝え、タグをねらうことを確認した。</li> <li>・相手がリスタートする時、支援者が、B児が守備の標的とすべき相手、背中を押して相手のタグをとるように促すと、適時にB児は相手に駆け寄った。</li> <li>・スタートの場面で、支援者はB児とC児に対して、指差して守備の標的とすべき相手を指さし、タグをねらうことを確認した。</li> <li>・相手の攻撃が始まる前、相手を指差しながら、支援者とC児が守備戦術を打ち合わせた。</li> </ul>

者が子どもの手を引いたり、ボールを保持しているプレーヤーとの位置関係や戦術の意図を確認したりすることなどがなされていた。

## (2) 守備場面における伝達

カテゴリー「守備場面における伝達」は次の2つのサブカテゴリーから構成された。すなわち、①守備位置に着くための伝達、②標的とする相手プレーヤーを把握するための伝達、である。これらについて、根拠となったエピソード記述と併せて表3に一覧した。

これによれば、①守備位置に着くための伝達の場面には、「スタート直前の場面で、得点板にいるB児を支援者が守備位置から手招きで呼ぶと、B児は駆け足で守備位置に着いた。」「相手チームのリスタートの場面で、相手攻撃プレーヤーに抜かれ取り残されているC児を、支援者が新たな守備位置を指差すと、C児は直ぐにそこに着いた」などのエピソード記述が7件あった。ここでは、ゲームのスタート場面すなわち相手の攻撃開始の場面での守備陣形を整える場面での準備と、ゲーム中のリスタート場面での随時の状況判断に基づく対応に関して、支援者からの声かけがなされていた。

②標的とする相手プレーヤーを把握するための伝達の場面には、「スタートの場面で、支援者が守備の標的とすべき相手を指さし確認すると、それを模してA児も同様に目の前にいる相手を指差し確認した」「スタートの場面で、支援者は、B児が守備の標的とすべき相手を指さし、B児と視線を合わせてタグをねらうことを確認した」などのエピソード記述が13件あった。ここでは、ゲームのスタート場面すなわち相手の攻撃開始の場面での守備陣形を整える場面での準備の一環として、支援者と子どもが具体的な守備プレーの要領として標的を定めることがなされていた。また、特定の子どもに対する同一エピソードがあり、支援的な意図による繰り返しかかわりがなされていた。

## 2 「共感」(子どもと支援者の間で見られた感情の交流)

大カテゴリー「共感」は、カテゴリー「成功に対する喜び」「失敗に対する励まし」「戦術の理解を共有した喜び」から構成されていた。これらについて、根拠となったエピソード記述と併せて表4に一覧した。具体的には以下の通りである。

### (1) 成功に対する喜びの共感

カテゴリー「成功に対する喜びの共感」は次の2つのサブカテゴリーから構成された。すなわち、①自分のプレーの成功に対する喜び、②仲間のプレーの成功に対する喜びの共感、である。

①自分のプレーの成功に対する喜びの共感場面には、「A児がトライを決めて相手チームの自陣に戻ってくる場面で、前方から支援者がかがんで両手を差し出すとA児はハイタッチをして喜んだ」「C児がトライを決めた直後の場面で、支援者の手につかまり飛び跳ねていた」などのエピソード記述が10件あった。ここでは、子ども自身がトライを決めた直後に支援者が子どもに対してハイタッチを求め、子どもがそれに答えることがあった。これが、ラグビー場面の定型的な喜びを共有する表現行動として反復され、定着していた。また、ハイタッチに応ずる以外の子ども自身の喜びの表現や支援者とのかかわりも見られた。

②仲間のプレーの成功に対する喜びの共感場面には、「C児がトライを決めた場面で、支援者が片手を差し出しA児に向かって行くと、A児も勢いよくハイタッチをした」「A児がトライを決めた場面で、B児が両手を差し出し支援者に近づいてきて、二人でハイタッチをした」などのエピソード記述が7件あった。ここでは、仲間によるトライを自チームの攻撃の成功として認知していることが前提としてあり、かつ、子どもと支援者間で定型的な喜びを共有する表現行動として用いられていた。

### (2) 失敗に対する励ましによる共感

カテゴリー「失敗に対する励ましによる共感」の場面には、「C児から支援者がパスを受けた直

表4 「共感」による支援

サブカテゴリー名	エピソード記述
自分のプレーの成功に対する喜びの共感	・A児がトライを決めて相手チームの自陣に戻ってくる場面で、前方から支援者がかがんで両手を差し出すとA児はハイタッチをして喜んだ。
	・A児がトライを決めて相手チームの自陣に戻ってくる場面で、正面にいた支援者が両手を差し出すと、A児はハイタッチをした。
	・A児がトライを決めて相手チームの自陣に戻ってくる場面で、支援者がA児はハイタッチをした。
	・A児がトライを決めて相手チームの自陣に戻ってくる場面で、一緒に戻る支援者が左手を差し出すと、その右後ろを走っていたA児が応じてハイタッチをした。
	・A児がトライを決めた場面で、その後ろにいた支援者二人が拍手をして称賛した。
	・A児がトライを決めた場面で、自陣に戻る支援者二人が拍手をしてA児を迎えた。
	・A児がトライを決めた場面で、支援者二人が拍手をしてA児を称賛した。
	・B児がトライを決めた場面で、支援者が手を差し出すと戻ってきたB児は片手でハイタッチをした。
	・C児がトライを決めた直後の場面で、支援者の手につかまり飛び跳ねていた。
	・C児がトライを決めた時、自陣に戻りながら支援者が拍手をした。
仲間のプレーの成功に対する喜びの共感	・C児がトライを決めた場面で、支援者が片手を差し出しA児に向かって行くと、A児も勢よくハイタッチをした。
	・C児がトライを決めた場面で、支援者がA児に両手を差し出すと、A児もハイタッチをした。
	・B児からスタートした攻撃でC児がトライを決めた場面で、支援者がB児に「トライ決まったよ」と声を掛けた。
	・C児がトライを決めた場面で、支援者が片手を差し出しながらB児に近づくと、B児は両手を差し出しハイタッチをした。
	・A児がトライを決めた場面で、B児が両手を差し出し支援者に近づいてきて、二人でハイタッチをした。
プレーの失敗場面における、支援者から子どもに対する励ましによる共感	・A児がトライをして決めた得点を、得点板に入れに行ったB児が得点板から自陣に戻ってきた場面で、支援者が両手を差し出すとB児は片手でハイタッチを返した。
	・チームにおける定型の戦術が成功した場面で、C児が、「なんかいつものやつだ」と自らの気づきを口にし、それを聞いた支援者がこの子どもの気づきに対して支援者が感銘を受けうなずいた。

後の場面で、支援者が相手守備プレーヤーを引きつけた上で並走していたA児の前にボールを差し出すと、スムーズにボールを受け取り加速したが、落球してしまう。支援者二人が『惜しい』という声掛けでA児を励ます」が動画記録で確認できたものとしては唯一であった。励ましは、スポーツの場面ではつきものである。しかし、それがここで見当たらなかったのは、同機能のかかわりが他のかかわりや表現によってなされていることによった。例えば、子どもがタグを獲られたことを失敗として認知する場合がある。しかし、その直後に支援者はパスを求め、一連の戦術プレーの遂行しようとする。その結果、タグを獲られたことは失敗ではなく次のプレーへの移行として見なされる。子どもに対するかかわりも「ナイスパス」などの声がけになる。つまり、失敗に対するアプ

ローチとして、励ますことよりも「支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達」による対応が多くなされていることが考えられた。

#### IV 総合考察

本研究では、ラグビーのプレー中における対人関係の様相を明らかにすることを目的とした。Y団体におけるラグビーの実施場面を支援者と子どもの対人関係に着目して分析した結果から、ここで生起している対人関係は、子どもにとってのプレー中の役割遂行をめざすものであり、その遂行に資する実際的な働きかけといえた。この様相について以下のように考察した。

## 1 タグラグビーの文脈に規定された対人関係の様相

タグラグビーのプレー中における対人関係の様相の具体として、「支援者から子どもに対する役割遂行の実現に資する伝達」と「子どもと支援者の間で見られた感情の交流」があり、それぞれを「伝達」「共感」と称した。これらは「支援の三観点」における「ヒト（伝達、共感）」に一致すると考えられた。

これは同時に、一般的な人間関係における内容である「役割関係と感情交流<sup>20)</sup>」にも符合する。つまり、タグラグビーのプレー中における対人関係は、一般的な対人関係の内容が、タグラグビーの場面における支援者と子どもの関係という文脈に即して生起していた。換言すれば個々での対人関係の様相は、タグラグビーという活動の文脈によって必然的に規定されていた。

そもそも、運動場面は、他者との相互作用なしには成立しないといわれており<sup>21)</sup>、対人関係の場面が必然的に含まれている。その必然的結果として運動場面には、対人関係が促進される効果がある。例えば、身体接触を伴う運動は、他者との関わりやチームワーク、チームの一体感を促進する効果があることが知られている<sup>22)23)24)</sup>。一方で、発達障害がある子どもにとってはスポーツを共に行う他者が促進要因にも阻害要因にもなるとの指摘もある<sup>25)</sup>。裏を返せば、これは支援者の重要性の指摘であり、支援方法の希求と言えよう。

## 2 「伝達」と「共感」の相互作用

タグラグビーのプレー中における「伝達」の個別具体的な内容は、支援の三観点における「コト（活動の内容と展開）」に相当する。これを円滑かつ有効に伝達するために「ヒト（伝達と共感）」が有機的相補的な活用されるのである<sup>26)27)28)</sup>。

また、「伝達」は主に、子どもの役割遂行の実現状況に関するフィードバックとも言えた。すなわち「伝達」との連動によって生起しているといえた。そこには、子どもと支援者両者にとって、役割遂行の実現であるプレーの成功を目指す協働

的なプロセスの経験がある。ここで両者の間での対人関係の促進、共感の経験があり、ひいては相互理解と信頼が得られるであろう。そのことが基盤となり円滑かつ有効な「伝達」の実現にも寄与するのではないか。すなわち、支援者と子どもの間の信頼関係「伝達」と「共感」は独立的に表れ、機能するものではなく、両者の好循環的な相互作用が想定されるかもしれない。

## 3 今後の課題

今後の課題として以下の内容を指摘する。本研究では、限定した時期及び場면을対象とし、エピソードの記述内容をデータとした。個々に把握された対人関係の様相が、また、そもそも対人関係は、タグラグビーの文脈に規定されるならば、当然ながら、個別具体的な場面や対象者によって、その様相を異にするだろう。そこで、対象事例を定め、本研究で得られたカテゴリーを観点とした継続的な期間における観察を実施し、対人関係の様相の詳細を詳細に把握することが必要である。また、ここでは質的データ及び量的データをもってタグラグビーにおける対人関係の様相を把握し、その時系列的な変化や「ヒト（伝達と共感）」による支援としての機能や有効性を検討したい。

## 謝辞

本研究に際して、ご理解とご協力をくださった皆様に感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会(2011): 障害のある子どもの放課後活動ハンドブック. かもがわ出版.
- 2) 川上敬二郎(2011): 子どもたちの放課後を救え!. 文藝春秋.
- 3) 佐々木全・三田敏明(2014): 発達障害のある児の放課後・休日の実態調査－岩手県内の支援グループ参加者に対するアンケートから－. はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会, 年報花童・風童, 10, 30-36.

- 4) 佐々木全・佐々木章・安部千恵子・三田敏明(2014)：軽度発達障害児に対する「SST教室あじっこ」の実践報告. LD研究, 18, 2, 147-154.
- 5) 佐々木全(2009)：発達障害児(者)に対する、インフォーマルな支援グループの取り組みに関する検討－岩手県における「通所支援教室」の成果と課題－. 発達障害研究, 32, 2, 125-134.
- 6) 佐々木全・加藤義男(2010)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第11報)－単元「タグラグビー」における実践的検討－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 9, 175-190.
- 7) 佐々木全・伊藤篤司・名古屋恒彦(2012)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第15報)－参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(1)－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 11, 233-242.
- 8) 佐々木全・伊藤篤司・今野文龍(2016)：発達障害児に対する放課後活動「Act.」の実践報告－実践の意義と持続可能な運営のための工夫－. 岩手大学教育学部研究年報, 75, 89-103.
- 9) 鈴木秀人(2009)：公式ガイドブック だれでもできるタグラグビー. 小学館.
- 10) 鈴木秀人(2012)：派生的ボールゲームとしての「タグラグビー」に関する一考察－ラグビーフットボールとの相違点からの検討－. 体育科教育学研究28(2), 1-14.
- 11) 佐藤善人・鈴木秀人(2008)：小学校体育におけるタグ・ラグビーに関する一考察－ポートボールとの個人技術をめぐる「やさしさ」の比較を中心に－. 体育科教育学研究, 24(2), 1-11.
- 12) 佐々木全(2016)：子どもの不器用さを理解し、支援する. 月刊特別支援教育研究, 701, 7-11.
- 13) 佐々木全(2017)：発達障害児を対象としたタグラグビーにおける安全対策－岩手件A市のインフォーマルな支援グループにおける取組－. 岩手大学教育学部研究年報, 76, 63-75.
- 14) 川喜田二郎(1967)：発想法 創造性開発のために. 中公新書.
- 15) 川喜田二郎(1970)：続・発想法 KJ法の展開と応用. 中公新書.
- 16) 古田雅明(2016)：KJ法の臨床応用－実践的な指針の模索. 福島哲夫編 臨床現場で役立つ質的研究法. 新曜社, 21-51.
- 17) 佐々木全・加藤義男(2007)：高機能広汎性発達障害に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第七報)－今日の観点からの検討－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 6, 165-181.
- 18) 佐々木全・今野文龍・名古屋恒彦(2013)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第17報)－参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(2)－. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 12, 299-312.
- 19) 佐々木全(2018)：発達障害のある児者を対象とした「タグラグビー」における支援方法に関する事例的検討－ゲームプランと局面的戦術の統合的観点から－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 17, 1-10.
- 20) 國分康孝(1992)：人間関係がラクになる心理学. PHP文庫.
- 21) 森恭(2008)：社会性. 日本スポーツ心理学会編 スポーツ心理学事典. 大修館書店, 東京, 324-326.
- 22) 金ウンビ・伊東明宏・中塚健太郎・坂入洋右(2014)：音楽と身体接触を活用した運動が心理状態と対人関係に及ぼす効果. スポーツ心理学研究, 41(1), 19-34.
- 23) 渡部宣裕(2000)：スポーツ・パフォーマンスとしての身体接触の効果－バレーボールゲー

- ム（女子）について. 桜文論叢, 51, 147-164.
- 24) 木村勇・加藤敏弘(2005)：非言語的身体接触がチームメイトに及ぼす影響. 茨城大学教育実践研究, 24, 295-308.
- 25) 杉山文乃・澤江幸則・齊藤まゆみ(2015)：自閉症スペクトラム障害のある人の生涯スポーツ実践における促進要因と阻害要因(2) ～個別の事例をもとに～. 第35回医療体育研究会／第18回日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第16回合同大会抄録集ポスター発表, リハビリテーションスポーツ, 34(1), 23.
- 26) 佐々木全・加藤義男(2011)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第13報）－ねがいの実現状況と、支援方法の関係性に着目して－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 10, 211-220.
- 27) 佐々木全・名古屋恒彦(2014)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第18報）－単元「タグラグビー」における、支援方法としての「活動内容及び展開」の検討－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 14, 203-213.
- 28) 佐々木全・名古屋恒彦(2015)：高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第19報）－参加児の活動経過及び心的過程に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(3)－. 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 15, 409-421.